

【ポスター発表】

医療ソーシャルワーカーを対象とした 退院援助における家族評価の実践状況の類型化および関連要因の検討

○ 岡山県立大学大学院 倉本亜優未 (9255)

杉山 京 (日本福祉大学・8498)、仲井達哉 (川崎医療福祉大学・8513)、竹本与志人 (岡山県立大学・4927)

キーワード：医療ソーシャルワーカー、退院援助、家族評価

1. 研究目的

わが国における少子高齢化の進展は、国民医療費を増大させ財政に多大な影響を与えている。その対応方策として、診療報酬制度においては退院支援に関する評価が強化され、同時にその算定要件に明記される社会福祉士に期待が寄せられている。保健医療を領域とする社会福祉士は医療ソーシャルワーカー (Medical Social Worker : 以下、MSW) と呼ばれ、その援助はインテーク、アセスメント、プランニングなど6つの局面により展開される。なかでもソーシャルワーク実践の中心的概念であるアセスメントは、介入効果の高低を規定する最も重要な援助段階のひとつ (中村 2002) である。特に、家族が課題を抱えている場合においては患者のみならず家族を対象としたアプローチが求められ (福山 2009)、家族に関する評価 (以下、家族評価) が重要となる。しかしながら現段階において、退院援助における家族評価に関する実践の実態を報告したものはない。よって本研究は、MSWの養成・現任研修を意図とした教育活動における課題および援助実践能力の向上を目指した指針を明示することをねらいに、MSWの退院援助における家族評価に関する実践状況を類型化し、その関連要因を明らかにすることを目的とした。

2. 研究の視点および方法

調査対象者は近畿、中国ならびに中部地方内の8府県における医療機関844ヶ所に勤務するMSW844名とした。調査票は、調査依頼書 (趣旨説明等を含む) 等とともに医療機関の管理者宛に送付し、各医療機関1名のMSWに回答を依頼した。本調査は自記式質問紙にて2017年12月～2018年1月に実施し、調査項目は調査対象者および所属する医療機関の属性、退院援助における家族評価の実践状況等を設定し、回答を求めた。「退院援助における家族評価の実践状況」に関する質問項目は、退院支援における家族に関するアセスメントの視点を文献的検討により抽出した倉本 (投稿中) の研究を参考に、豊富な臨床経験を有する現任のMSWおよび大学教員計3名の助言を得て、臨床上の必要性が認められる内容として18因子78項目を設定した。

統計解析には、当該項目に欠損値のないデータを用いた。解析は、まず「退院援助における家族評価の実践状況」の構成概念妥当性を、構造方程式モデリングを用いて検討した。次いで、前段階で支持された因子を基に潜在クラス分析 (渡辺 2001) を用いて類型化を行った。さらに、潜在クラス分析により推定された各潜在クラスと分析対象者の属性等の関

連性について、潜在クラスを同時推定した多項ロジットモデルを用いて検討した。なお、潜在クラス分析および多項ロジットモデルにおける推定法には最尤法を用い、すべての解析における有意性は5%有意水準とした。以上の解析には、統計ソフト「IBM SPSS 22J for Windows」ならびに「Mplus version 7.2」を用いた。

3. 倫理的配慮

本調査の実施にあたり対象者には調査の趣旨、匿名性の保障、調査協力は自由意思（任意）であること等について文書にて説明し、調査票の返送をもって調査への同意が得られたものと判断した。なお、本調査は2017年11月24日に岡山県立大学倫理審査委員会の審査・承認を得て実施した（受付番号：17-65）。

4. 研究結果

回答は267名から得られ（回収率：31.6%）、統計解析には、当該項目に欠損値を有さない244名のデータ（調査対象者の28.9%；回答者の91.4%）を用いた。まず「退院援助における家族評価の実践状況」の構成概念妥当性の検討に先立って、各項目の多分相関係数を参考に、冗長性が高いと判断された6項目を削除した。次いで18因子斜交モデルを設定しWLSMVをパラメータの推定法に検証的因子分析を行ったところ、統計学的許容水準を満たした（CFI=0.972、RMSEA=0.036）。さらに潜在クラス分析を行った結果、クラス数の決定のための適合度指標であるBICならびに標本の分類の正確性を示す指標であるEntropyおよび各クラスにおける所属確率から4クラスモデルが最適であると判断した。推定された各潜在クラスの家族評価実践の条件付き応答確率から、クラスごとの特徴が確認された。また、抽出された4クラスの中で家族評価実践が最も良好と考えられたクラスを基準に、潜在クラスと分析対象者の属性等との関連性を、潜在クラスを同時推定した多項ロジットモデルを用いて検討した結果、「家族アセスメントに関する受講経験」は、実践に最も課題があると考えられたクラス（オッズ比：0.216、95%信頼区間：0.071-0.661、 $p=0.007$ ）および、次いで課題があると考えられたクラス（オッズ比：0.447、95%信頼区間：0.232-0.861、 $p=0.016$ ）との間に有意な関連を示した。

5. 考察

分析の結果、退院援助における家族評価実践に関してMSWは4つのクラスに類型化された。家族評価を適切に実践していると考えられるMSWは全体の約3割にとどまり、家族評価実践の特徴と課題が確認された。また、これらの類型化に「家族アセスメントに関する受講経験」が有意に関連することが明らかとなり、MSWの養成・現任研修を意図とした教育活動における示唆を得た。今後は、家族評価の実践状況に関し、在院日数等のアウトカムを設定してその関連性を検討するなど、より詳細な実態解明が求められる。

※本研究は平成29年度岡山県立大学独創的研究助成費（医療ソーシャルワーカーを対象としたアセスメント実践に関する研究；2017年度；研究代表者 竹本与志人）より助成を受けて実施した研究の一部である。